

あらばしり

大松 達知

おならつてね、ブーって鳴るからお鳴らなんだよ、と娘に言う。だが、鳴るでなく鳴らすの連用形を名詞化して「お」をつけた「お鳴らし」が原形らしい。あれは鳴らすものなんだな。(いきなりすいません。)

だが、神様が鳴らしてもカミナラではなくてカミナリ。かつては挟むものだったハサミ、水を流す流し、染みたらシミ、はたくからハタキ、悩み、漏れ、サボリ、などなど「連用形名詞」はいくらでもある。人間は動くことで成り立っていて、言葉とは人間の動きの集成なのだと再認識するのである。

というか、例えば英語の場合は形が変化せずそのまま品詞が変わる。Cleanはきれいな／きれいに／きれいにする／きれいになる／掃除、の五つの意味を持つ。文の中の位置によってどれに当たるのが決まる。だから、日本語のように変形してくれた方が便利な面もある。そもそも言語は便利で手軽な方向に変化してゆくものだ。

話を戻すと、特に人の性質を表すときの連用形名詞が良い。甘ったれ、酔っぱらい、かっぱらい、ぼったくり、ツレイ。あるいは、嘘つき、女たらし、鬼ころし(日本酒の銘柄です)、など目的語+動詞のパターンもある。

あるいは、本降り、殴り書き、へそくり(元は、へそくり金)、生焼け、棒読み、置き引き、上げき、葛きり、ぼつと出、恵方巻き、角打ち(酒屋で立ち飲みすること)、など、うまく分類できないものもある。ただ、自動詞でも他動詞でも、上についた要素は省略できないようだ。女たらず、生焼ける、棒読み、などとは言わない。

「お」がつくとさらに別の意味になったりする。絞りの着物は高価だが、おしぼりは日用品、冷やお酒で、お冷や水。焼きは回るけど、お焼きは食べもの。話のさわりを聞くのはいいが、お触りはダメよ。(「さわり」は本来は浄瑠璃の「聞かせどころ」を意味したらしい。)

さて、もっとも美しい連用形名詞は「あらばしり(荒ばしり)」だろうか。アアアイ段で響く。日本酒を絞り出すとき、もろみの重さだけで自然に出てくるいちばん最初の部分のことだ。

香り立つ「八海山」のあらばしり暖簾の外は春の雨で
す 久々湊盈子

だけど実は、久々湊さんは「新酒(新ばしり)」の意味で使われたことを、この稿を書きながら知ったしだい。